

ねじりはちまき

6月 水無月 芒種 夏至の月になりました。

6月1日 衣替えです。6日 芒種。11日 入梅です。18日 父の日。
21日 夏至となっています。

旧暦の5月28日に降る雨を、「虎が雨」というそうです。

新暦だと、今年は7月11日になります。気象学的にも、雨が多い特異日とされています。

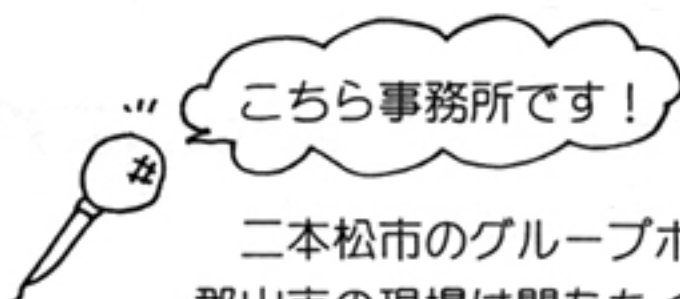
鎌倉時代のこの日に、兄十郎祐成と、弟五郎時致の兄弟が父の仇討のため、富士の裾野の工藤祐経を討ち果たしたという伝説があります。

十郎は討ち死にし、五郎は翌日処刑されたというもので、のちに「曽我物語」として脚色され世に広まりました。

「虎が雨」の他に「虎の涙雨」「曽我の雨」など、いづれ雨が多いという特徴と、十郎の愛人だった遊女、虎御前が十郎の死を悲しんで流す涙が雨となって降る、というものに由来しているんだそうですね。

梅雨寒ということがあります。お体には、十分にご留意下さい。

幸田 常一



二本松市のグループホームの現場をお世話になっております。
郡山市の現場は間もなく完成と先月号でお伝えいたしましたが、
追加工事をいただきましたので、引き続き工事をお世話になって
おります。

<お知らせ>

7/7(土)～7/8(日)は弊社研修会のため、お休みさせて
いただきます。尚、7/9(月)は平常通りの営業です。

日本歴史における東北の舞台

昨年松島に行った時、多賀城市の東北歴史博物館に寄ってみた。その博物館には坂上田村麻呂が蝦夷地を征服した歴史上の出来事が紹介されていた。8世紀末のことである。そこで今回は日本歴史における東北の舞台について取り上げてみたいと思って筆を執った。時代順に追っていく。先ず青森市の山内丸山遺跡（国特別遺跡）について。これについては先に取り上げたことがあったが、縄文時代の遺跡のなかで、日本最大級の集落遺跡であり、かつ縄文文化のイメージを変えるものであったのだ。今から約5,500年～4,000年前の縄文集落全体の様子が具体的に分かるもので、しかも定住生活が営まれていることを示すものであったのだ。竪穴住居（大型のものもあり）、掘立柱建物（大型のものもあり）、貯蔵穴、道路、大人・子どもの墓など遺跡があり、土器・石器・木器・土偶・装身具の類は勿論のこと、それに加えてヒョウタン・ゴボウ・マメ等の作物が栽培されていたこと、クリ（食用・建築用）も栽培されていたことが明らかになったのだ。しかも、出土遺品からかなり広域にわたる交流がなされていたことも分かってきている。これも予想外である。つまり、1万年続いたと言われる縄文時代も一括りに出来ないわけで、後期に入るとかなり様相が変わってきて、定住と交流がなされるようになってきたということであろう。我々が学校で習った縄文時代のイメージを変える遺跡が東北から発見された意義は大きい。

次に古代東北が蝦夷地と言われた時代の話である。当時蝦夷（えみし）は縄文の生活文化を継承していたのであるが、蝦夷という呼称は中央政権・大和朝廷の側から見た蔑称である。蝦夷の勢力範囲は、福島県は含まれず、宮城県中部から山形県の以北であったという。この蝦夷がなかなか中央政権に従わず、征討に及ぶものの反乱を繰り返した。それは永きに亘ったようで、旧くは古事記神話に「日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が東方の蛮族を征討するよう命じられた」とあり、古墳時代から蝦夷征討がなされたようである。歴史記録によれば、7世紀の中頃から城柵を築き征討が本格化して徐々に従うところも出てくるが、一方で激しく抵抗するところもある。奈良時代に入って間もなく、多賀城柵（宮城県多賀城市）が築かれ、蝦夷に対する前線基地として陸奥国府が置かれる（724年）。蝦夷征討の山場は774年～811年（奈良後期～平安初期）の38年戦争といわれる時期である。この間の791年から坂上田村麻呂が登場する。坂上田村麻呂は征討の実績を上げ、791年には征夷大將軍に任ぜられ、802年には蝦夷の軍事指導者であるアテルイとモレを降伏させるに至る。その後も反乱は勃発するが、延久蝦夷合戦（1070年）を最後に征討は行われなくなり、この頃から奥州藤原氏の時代にかけて本州北端まで中央政権下に降ったと考えられる。白河の関は蝦夷の南下を防ぐ役割もあったという。それにしても蝦夷はどうして中央政権にこんなにまで抵抗したのだろうか。よく分からないが、大和にある中央政権に対して受け入れがたい違和感が根強くあったのは間違いあるまい。

次に奥州藤原氏の名が出てきたのでその話に移る。藤原氏は平安時代後期（11世紀末～12世紀末）の約100年間栄華を極め、平泉を拠点に奥州（東北）を治めることになった。藤原氏の治世は4代（清衡・基衡・秀衡・泰衡）に亘る。なぜそうなったのか。先ず地元産の砂金と良馬の威力である。この二つをこまめに献上して時の朝廷と摂関家の信頼を得たこと、政治姿勢としては朝廷に対して何事も協力する姿勢で臨んだこと、時の朝廷を取り巻く情勢（奥州を構ってられない）も幸いしたことで実質奥州統治を任され、そして然るべき押領使などの官位を得ていくのだ。しかも朝廷が源平合戦に巻き込まれていく中で、中立の立場を保ち、いわば半独立国の状態でもあった。栄華を極めた藤原氏は清衡の時代に中尊寺金色堂を建立、基衡の時代に毛越寺を建立し、浄土思想に基づく仏教文化いわゆる平泉文化が栄えた。しかしその藤原氏に衰退の兆しが訪れる。秀衡の時平氏に代わって登場した源氏との関係が悪化する。ご承知の通り頼朝から追討令が出ている義経を秀衡が匿い、義経の身柄引き渡しを頑強に拒んだのだ。が、その最中に秀衡が没し、泰時

が後を継ぐ。泰時は頼朝の要求を拒み切れず、義経を引き渡しはしなかったものの、自決に追い込んでしまう。だが、それでも頼朝は奥州藤原氏の存在を許しておけないとして、ついに奥州藤原氏は鎌倉幕府に滅ぼされるに至る。1189年のことだった。それにしても、奥州藤原氏の出自だが、藤原摂関家から一族に連なるものと認められていたことは間違いなさそうだ。故あって奥州に移ることになり、そこでやがて頭角を現すのだ。

次は伊達政宗のことだ。なぜ取り上げるかというと、政宗と言えば、1602年に仙台藩を開府し、その石高は62万石で、全国3位の雄藩を築いた。そこに至るまで様々なエピソードがあるが、ここでは二つ紹介する。その一つは「伊達者」の話。1593年、秀吉の文禄の役に従軍した時、政宗が伊達家の部隊にあつらえた戦装束は非常に絢爛豪華なもので、上洛の道中（特に京においては）において巷間の噂となった。それ以降「派手な装いを好み、着こなす人を指す」ことばとなったということだ。政宗の性格を現わしている。

二つ目は「慶長欧州派遣使節」のことである。1613年、政宗は仙台藩とエスパーニャ（スペイン）との通商を企図し、エスパーニャの使節の協力を得てガレポン船を建造し、家康の承認を得て、ルイス・ソテロ（エスパーニャの使節）を正使、支倉常長を副使に任命し、一行180人をヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）、エスパーニャへ派遣したのだ。この使節派遣は、日本人が初めてヨーロッパへ赴いて外交交渉をした画期的できごとであったし、常長らは太平洋・大西洋の横断に成功した初めての日本人であった。しかし、エスパーニャとの通商交渉は失敗に終わる。支倉らがエスパーニャで交渉に当たろうとした時に、既に我が国でのキリスト教弾圧の情報がエスパーニャ国王にもたらされていたのだ。支倉はキリスト教の洗礼を受けて友好の姿勢を示したが、交渉に応じてもらえず、終に通商交渉の道は閉ざされてしまう。政宗の野望も情勢の変化の前に潰えてしまったのだ。

最後に戊辰戦争を取り上げたい。戊辰戦争は1868年1月に勃発した鳥羽伏見の戦いを端緒に1869年5月の五稜郭の戦いで榎本武揚が降伏したことで終わる。実は鳥羽・伏見の戦いの直前に「王政復古の大号令」が発せられ、その年の9月に明治へ改元される（明治天皇の即位は1867年1月。東京へ移られるのは1869年3月）。明治改元の9月というのは、会津藩が新政府軍に鶴ヶ城の攻撃を受けて（1868年8月から）敗れ、降伏した月なのである。会津藩が降伏して改元がなされたのだ。新政府軍と旧幕府軍との戊辰戦争で、薩長を中心とする新政府軍から見れば「賊軍」の代表格であった会津藩が降伏したわけである。この「官軍・賊軍」という言い方は鳥羽伏見の戦い（会津・桑名藩が主力）の時、新政府軍に錦の御旗が与えられ、「官軍・賊軍」の勅令が出された。伏見鳥羽の戦いで勝利した新政府軍は錦の御旗の下東征を開始し、江戸城の無血開城（1868年4月）を果たした後、「賊軍」の象徴としての会津藩に軍を向ける。その頃31藩で奥羽越列藩同盟が結ばれていたのであるが、その同盟も各藩の思惑の違いがあり、大きな抵抗勢力とはなり得ず、会津藩が新政府軍に降伏することにより戊辰戦争は実質的に終りを迎える。薩長の新政府が目指したのはあくまで「武力倒幕」であったのだ。

今年は戊辰戦争から150年に当たり、維新再考のテーマで様々な論じられている。小生としては薩長の工作で出された「官軍」・「賊軍」の勅令に言いようのない怒りを覚える。会津藩は終始勤皇の立場であり、あくまで薩長のやり方に抵抗したにすぎないことを忘れてならない。今回はこれで終わる。

帝釈山(たいしゃくさん 2060m)・田代山(たしろやま 1926m)

帝釈山は日本二百名山、隣接する田代山は花の百名山に選ばれている。福島県と栃木県境にある二つの山に登ったのは10年以上前のことだ。前には旧館岩村の湯ノ花温泉側の猿倉登山口から登った。

今回は檜枝岐村(面積390km²、人口600人余、温泉全戸給湯)側の馬坂登山口から登ることにした。

5月29日(火)16時本宮の自宅発、郡山南ICから、羽鳥湖、田島、山口経由で檜枝岐村に18:50着。村営温泉「燧の湯」の所の橋を渡り少し行くと林道は未舗装となり、暗くなっても案内標識があり迷うことはないが、所々に、「クマ出没注意」と「落石注意」の看板が立っている。気持ちの良いものではない。

途中中型の鹿3尾と遭遇する。時速10~15kmで登山口着は19時半を過ぎた。20台くらいおける駐車場にはもちろん1台もない。

お湯を沸かしてカップみそ汁と妻の作ってくれたおにぎりを食べ赤霧島の焼酎で晩酌する。いつも夕食は“米”は食べないことにしているが明日のためにきちんと食べる。

30日、5時前に起きお湯を沸かす。曇りで、ゆっくりと流れる黒い雲の塊から小粒の雨が降ってきたがすぐに過ぎ去った。

6:50出発。樹林の中の登山道は刈払されていて、傷んだ木道や階段なども修理されたばかりでチェーンソーできられた木屑が真新しい。この時点では自分はどの草がオサバグサなのか分からなかった。

7:35帝釈山山頂着、風が強い。楽勝の山歩きだった。岩場の山頂からの眺めは、高曇りで見通しはきいた。会津駒ヶ岳連峰は上部に雪が残っているがまだらで、日当たりの良い南東側は雪がなく黒々していて稜線でくっきりと分かれている。燧ヶ岳は先月28日反対側の尾瀬ヶ原から見た、裾を引く優美な姿とは異なりゴツい感じだ。左側の至仏山もこの1か月でかなり雪が溶けたようだ。燧の右側平ヶ岳はスカイラインが美しい。さらに右奥にうっすらと見える越後三山は、八海山(1778m、二百名山)と越後駒ヶ岳(2003m、百名山)を両脇に従えて中ノ岳(2085m、二百名山)がどっしりと構えている。ここから見ると三山の盟主は越後駒でなく中ノ岳であることがよく分かる。

南側には女峰山(二百名山)や太郎山(三百名山)などの日光の山々が黒っぽく雲の上に浮かんでいる。男体山(百名山)は太郎山の奥に隠れているが一回り大きく縁だけが見えている。右には関東以北最高峰日光白根山(2578m、百名山)が山々の間から頭を突き出している。東側には高原山(三百名山)と思われる山塊が連なり、那須連峰も見えている。いずれも登った山だ。

風強く長居せず7:45田代山に向け出発。雲が薄くなり太陽が顔を出そうと

するが出し切れない。急斜面の岩場を慎重に下る途中、岩の割れ目から 10 個以上の花を付けたピンクのイワカガミが今は盛りと咲いていた。岩場が終わり樹林帯に入る手前でふと頭を上げるとしゃくなげに出合った。ドキッとすると感動ものだ。写真を撮っていると遠くからピーーピーーという鹿の鳴き声が聞こえた。

尾根北側の樹林帯を通る道には所々残雪があり、ぬかるんでいる。田代山頂近くになると風も強くなるので、手前で一休みしバナナを食べる。

9:05 弘法大師堂（田代山避難小屋、高床式）に着く。

樹林帯の木道を少し行くといきなり明るい広々とした湿原に出る。花の百名山田代山だ。右回り一方通行の木道の両脇には数は多くはないがチングルマが咲いていた。湿原の外側にしゃくなげも咲いていたが濃いピンクのつぼみが多かった。本格的な花の季節はこれからだ。

少し気になったのは 10 数年前より湿原が狭くなったように感じたことだ。全体の広さは変わらないのだろうが、所々檜（？）などの幼木などが生えてきて、少し広くなった島には水芭蕉やしゃくなげが自生し湿原全体の眺望が遮られるところがあった。いきなり温暖化のせいかな？などとは大言できないが、詳しい人に聞いてみたいと思った。

田代山山頂標識のある湿原の近くには雪が溶けたばかりの小さな池塘が沢山散らばっており、その先の西方には会津駒ヶ岳の山並みが遠望できた。

写真を撮りながらの木道一周で 35 分だった。

9:50 弘法大師堂まで戻り往路を引き返す。参考までに階段を上がり避難小屋を覗いてみたが、こぎれいで掃除されたばかりのようで、ここなら泊まっても良いと思った。平成 24 年に作られた立派なトイレはまだ閉鎖されていた。

帝釈山 11 時着。少し下ったところでカメラを提げた一人の同年配の登山者と出会い立ち話をする。駒ノ小屋に 2 泊し会津駒ヶ岳で“遊んで”きたとのこと。

オサバグサの話になり写真を見せて貰った。下りながら注意して見ていると、まだ群落とまでは咲いていないが所々に数株ずつ咲いているのが目に入った。

葉の形はシダ類に似て、高さは 15cm 前後、上部に小さな白色の 4 弁の花が下向きに咲いている。可憐だ。

村では 6 月 2 日から 17 日までオサバグサ祭りを開催することになっていて、登山道の整備や小屋がきれいになっていたことに納得した。

11:50 登山口着、5 時間の山行だった。車の中でパンを食べていたら雨がぱらついてきた。翌日日帰りで会津駒ヶ岳に登ろうとも思っていたが、この後の天気予報も悪いので、今回はこれまでとし、燗の湯につかり帰途に就く。

平成 30 年 6 月 NO68 アンチエイジング 山旅遊人

<会社近況>

6月に入りました。

暖かい日が続きますね。たまに、日射しが強く肌がヒリヒリ焼けるような日もありますね。これからの季節、熱中症が心配されます。こまめに水分を摂ったり疲れたら休息を取るなど、お体大事にしてください。

弊社ではすでに冷凍庫が大活躍しています。氷や保冷剤を入れておくのと、むぎ茶やジュースやポカリスエットなど凍らせて、現場へ持って行くのです。二本松市の現場はあまり時間もない様で、大工の他に現場管理の鈴木もほぼ毎日現場に入っております。冷たい飲み物で一息ついてもらいたいと思います。

おいしい♥6月

「ピーマン」

苦味やにおいが苦手…という方もありますが、ピーマン特有の青臭さの成分が、血液の流れをさらさらにしてくれるそうです。

ビタミンA、C、Eが豊富な野菜で、ビタミンCはレモンの2倍、トマトの5倍もあるそうです。

肉詰めや炒めもの、薄くスライスしてサラダにしても合います。

冷凍保存もできますので、夏にたくさん収穫できたときは冷凍しておくといつでも食べられますね。

冷凍保存する際は、タネやへたを取って水分をよく拭き取ってください。

平成30年6月5日 発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢字八幡1-1

☎ 0243-44-3816

<後記>

外に出たら倉庫の入り口に小鳥が…。暑くて休んでいたのでしょうか。白と黒の小鳥、これはセキレイでしょうか。逃げる気配もなく目の前をフンフンと跳ねて、まあかわいいこと。癒されました。(事務員k)